
魔法学校『武陽中学校』にて

ボーマン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法学校『武陽中学校』にて

【Zコード】

Z4507D

【作者名】

ボーマン

【あらすじ】

十文字家の秘蔵つ子で箱入り息子の進が何を思ったのか中学校へ行きたいと言い出した。進を待つのは薔薇色の学校生活か！？青春か！？はたまた地獄か！？（作者にはまだまだ至らないところが数多くあります。誤字脱字も多いかもしれませんので気付いた方がいましたら教えていただきたいと思います、皆さん協力お願ひします

＾＾；）

「もう嫌だつ！！なんで毎日毎日勉強なんかしなくちゃいけないんだつ！！僕が特別？それが運命？僕のため？下らない下らない、もういいよ・・・。僕の方が父さんや母さんなんかよりも圧倒的に強いんだつ！！それなのに産まれてから一度も家の敷地から出してもらえないし、家にある魔術書全部読破して覚えたのに、禁術って呼ばれる魔法だつて覚えて見せたのに・・・これ以上僕に何しろって言うんだよっ！！」

森の中にひつそりと建つ洋館の一室から一人の少年の怒鳴り声が鳴り響いていた。魔法、それは今から五十年前に発見された遺跡から数万年の時を経て現代に蘇つたものでいつたい何故蘇つたのかは今も専門の人間が調査している。ただ一つだけわかる事がある、それは五十年前の遺跡が発見された日から世界各地で似たような遺跡が突如として現われ、全ての人間が魔法と言う未知の力を使えるようになつたと言う事だ。最初に遺跡を発見した者は次の日には宙に物体を浮かせられるようになり、遺跡から発見された物を分析し文字を解読し魔法の理論と言うものも見えてきた。ただそれは殆ど感覚的なものでまず普通の人間には理解はできない。世界ではそのような大多数の人間を一般人、通称ランク落ちと呼び。次にその感覚的なものを理解する事はできるが理解に多大な時間が掛かってしまう人間を準人、通称ランクCと呼び、あまり時間の掛からないものを賢人、通称ランクBと呼び、その上を天人、通称ランクA。そして一番上の人間を神人、通称ランクSと呼ぶこととなつていた。

発見されてから五十年で人間は魔法を身近なものとして考えられるようになつていた。だが魔法にも優劣はある、というよりも魔法の才能は先天的なものでその一つに魔力値の絶対量がある。これは子供から大人になるまでの間に決まつてしまふものが殆ど小さい頃に低かつたものは伸びない、逆に小さい頃から高かつたものは驚く

ほど伸びる。それにさつきも説明したが感覚的理閑も才能の一つだ、魔術書の一部を例に挙げてみたいと思う。

『風と土の魔力を混ぜて草木を作り出し魔力を一・二・三の入れ具合で

左右に蔓を振るう』

さてここで質問だが皆さん腕を動かす時に考えてやっていますか？というより腕に力を一入れて動かしてくださいと言われて分かりますか？大体は縦に振つてください、などといった大雑把なものでしょ？つまりそういうことです。動き全てに計算をして行うこれが魔法なのです。分かる人には分かるし分からぬ人には分からぬい、そういうものなのです。おっと少し説明が長くなりましたね、それでは物語に戻りたいと思います。

少年は怒っていた、彼は今年で十四歳普通ならば中学校に行き立派に青春を謳歌しているはずの年頃だが、彼は生まれてからたった一人の同年代にしかあつた事がない。相手は異性で結婚を約束させられた相手いわゆる許婚だ。そもそも彼はこの家の唯一の跡取として箱入り娘ならぬ箱入り息子として育てられてきたのだがいい加減嫌になつてきていた。しかし数日前まで彼はこんなに自分の現状を嘆いていたわけではなかつた。

それは数日前の魔法の訓練が全て終わり時間を持て余しているときだつた。父親の書斎に食べ物を探して潜り込んだ少年が書斎で見つけたものは魔法学校の案内だつた。初めに引っ掛けたのは魔法学校と言うものだつた。魔法と言うものは自分は熟知している自信があるので気にも止まらなかつたが次の単語である学校と言う文字が妙に頭に引っ掛けた。

少年は自分の部屋に戻ると辞書で学校と言うものを調べ始めた、知りたいものは物の十数秒で見つかつた。意味は一定の教育目的のもとで教師が生徒と呼ばれる教えを請うものに組織となつて教育を行うと言うものだつた。一定の教育目的とは多分魔法だろう、だが何故それを自身の親ではなく他人に教わろうとするのか全く分からなかつた。少年は案内を見て自分と同じくらいの人達が楽しそうな笑

顔を向けていいる写真を見つけた。純粹に羨ましいと思つた、だから少年はその日の内に親に魔法学校に行きたいと言つた。その言葉を聞いた瞬間一人の目の色が変わっていた、優しそうな一人の顔が見る見るうちに鬼のように激しくなつていく・・・少年も負けじと睨み返した。そこで初めての親子喧嘩が始まった。

「進お前の気持ちも分からなくはない、だがお前は我が十文字家の跡取、まだまだ勉強しなくてはいけない事が多いんだ」

父親は少年、十文字進を睨みながら言う。母親も隣で頷いている。「父さん母さんお願いします、僕はこの家の魔法を全て覚えたしまナーダつて覚えました。泥を塗るような事はないと思います」「進の真摯な姿勢と眼差しも両親には届かなかつた。

「全て覚えただと? 生を受けてたかだか十四年で? 親を馬鹿にするのもいい加減にしなさい!!」

そう言つて父親は少年に燃え盛る火炎の球体を放つた。

「そんな中級魔法、効くはずがないでしょう」

少年が片腕を前に出すとそこから薄い水色の壁が出来た、球体と壁は拮抗し同時に砕け散つた。

「お願いです父さん母さん貴方達を傷つけたくない」

頭に血が上つた父親の方は全くの無視で攻撃を続行した、母親の方は少し涙ぐんでいた。

「行くなら私を倒していけつ!!」

「では、そうさせてもらいます。」

父親の方は魔力を右腕に溜め込むと殴るように正面に突き出した、拳から一軒家ほどの大きさの炎が拳の形となつて襲つていた。少年はまだ魔法を放とうとしない、それどころか目を瞑つている。その様子に母親は思わず手で目を覆つてしまつた。少年と炎の拳の距離が近くなつていぐ、十メートル、九メートル、八、七、六、五、四、三・・・。そしてついに一メートルを切つたところで少年は目を開け手を合わせる。一瞬辺りを光が包んだかと思うと次の瞬間には炎の拳は消えうずくまる父親の姿がそこには会つた。

「僕の勝ちです」

そう言つて少年は父親の傷を治し始めた。

そんな激闘から数日経つても全く変化は現れなかつた。そして今にいたるというわけだつた。

その時には、少年のストレスは限界地までに高まり普段あまり使わない口調となつていた。そしてその夜ついに少年は行動を起こした。皆が寝静まつた深夜静かに少年は荷物をまとめ窓から下りていた、風と土の合成魔法である草花の魔法の蔓で地面に降り今までに家の庭にある巨大な門を出ようとした時だつた。

「待ちなさい進」

その声は母親だつた、何をしてくるのかと警戒していた少年だつたが無用心に近づいてくる母親が持つているものを見て驚いた。

「これ、必要でしょ？しつかり持つて行きなさい、父さんなら大丈夫、しつかり説得しておくから、電話ぐらい時々しなさいね」

そう言つて渡されたのは魔法学校への入学書類と通帳だつた。

「か、母さん・・・これ・・・。」

少年は涙を浮かべていた、母親はそんな少年の頭を撫でながら「身体に気を付けなさいね」と言つていた。

ふと少年は何を思つたのか入学書類の名前欄の自分の名前の名字を消し、新しく天野あまのと名前を変えた。

「進・・・どうしたの？」

「母さん、十文字の名字はこの家に帰るまで捨てます、というかここに僕が絶対に帰つて来るという意思表示として残していくたいと思います。絶対帰つてきます、それまで・・・さようなら」

そこまで言つと少年は門の外の森へと走つていった。それから母親の背後から父親が現れる。

「進は・・・行つたのか」

「少し遅かったわね」

「二人は互いに寄り合い並んだ。

「進の奴、私を超えていったよ。しかも禁術どころか書斎の奥に隠

していった古代魔法まで覚えていたしな

「あの子は、自由な子、何処へでもいけるようひっつて進つておけたのにいつの間にか忘れていたわ・・・でも最後はやっぱり何処までも進んでいくのね・・・」

悲しそうに少年の走つていった門の方向を見つめる母親の田中穂也かなものだった。

「「あの子に幸せな生活が待つてこますよ」」「

一人で声を呟わせてそう願つた。

§第一話 §遭遇〇再開

森を走つて走つて走つて・・・たどり着いた先は未知の世界だった。草花なんて数えるほどしかない固いコンクリートと灰色のアスファルトが辺りを包み込む世界・・・その名も街少年は未知の世界こと街を歩いていた、途中で買つたクレープを美味そうに食べながら学校の場所を誰かに聞こうと歩いていると途中で人だかりを見つけた、周りの人間の声を聞いてみると何やら魔法を使った喧嘩らしい、興味本位で中央辺りまで来ると五人の男一人の少年が互いににらみ合っている。

「おいガキつ！！今俺らのことなんつたつ！！」

五人組一人が少年に近寄りながら言った。

「聞こえなかつたのか？準人は準人らしく媚び売つとけばいいって言つたんだよ」

少年は呆れたように言うと五人組は怒りをあらわにして何の前触れもなく魔法を使つた。五人とも得意な魔法は同じらしく指先から電撃を発生させ少年に向かつて放つた。少年は少し笑みを浮かべ軽く足踏みをする、すると足元から烈風が吹き少年の体重を軽くする、少年は自然な動きで舞うように電撃を避けると五人組の眼前にまで突き進む、そこまで見て進は少年の避けた電撃が進んでいく方向を見た、そこにはたくさんの野次馬が・・・。

少年は手の平に大気を圧縮した風の塊を作り出し五人の鳩尾に放つ、五人はそれぞれ別の方向へ吹き飛び地面に叩きつけられる、とその瞬間少年の後方で爆発が起きた。振り返ると自分と同じぐらいの少年が立つていてるのが見えた、そう進だつた。

「作りの甘い電撃で助かつた・・・。」

進は周りの安全を確認すると少年の方に歩いていった。

「君・・・名前は？」

少年は怪訝な顔をして見せた

「何でお前に言う必要がある？」

その言葉を聞くとそれもそうだと納得したような顔を見せた進だつたがいきなり進は少年の手を掴んだ。

「名前は教えなくていいよ、でも彼らには謝つてもらうよ？」

そう言つて進は後方にいる先ほど電撃を浴びそうになつた野次馬を指差した。

「はあ？ 何で俺が……。」

「君はここで戦つた、ってことはそれなりに理由があつたのかかもしれない、でもそれに周りを巻き込んでいいけない。たとえそれが勝手に集まつた人たちでも自分の行動で危険に晒したならそれなりの代償を払つてもらわないといけないからね」

その言葉を聞いて少年は笑う、

「ばつかじやねえ～の？ こんな一般人いくら死んでも代わりなんていくらでもいるだろ？」

この言葉には温厚な進を頭に来た。

「死んでもいくらでも代わりがいるだつて？ ふざけるなっ！ そんな考え方根本から変えさせてやる」

そう言つて進は身構える

「やるんなら・・・後悔すんなよ？」

少年はさつきと同じように足踏みをする、身体が軽くなつたのを感じ攻撃しようとしたところで進が手を叩く音が聞こえた、すると身体が元の重さに戻りその場に立ち止まる。

「ちつ、反魔法で魔法を打ち消しやがったのか・・・。」

少年が次に行動しようとした時には進は地面を叩いていた、すると野次馬と戦っている二人を分けるように水色の壁が現れた。

「これで周りへの被害対策も完璧だ」

「お前・・・なめてんのか？」

怒りをあらわにする少年に進は手を振つて否定する。がそれを無視するように少年の両手から風弾の嵐が蹂躪する。進は手の平をふうと息を吹きかける、すると手の平を通過した息が炎に変わった。

風弾が炎の中を通過すると風弾は消えた。

「なつ！！ただの炎に俺の風弾が負けただと…？」

「負けたんじゃないよ、上昇気流に返っただけさ」

そして呆気に取られ散る少年に向かって進は指先をピンと鳴らす、音が反響し合い壁の中は音波が飛び交う。少年は平衡感覚を失ったのか耳を押さえながら方膝をついた。

「まだ・・・やるかい？」

そう言うと少年は苦々しい顔になる。

「降参と見ていいね？・・・じゃあ謝つてもらおうか」

やはりムカツクらしく少年は立ち上がって殴ろうとしたところで転んだ、足を見てみると靴の裏が地面と氷でくっ付いていた。

「ちつ、分かったよ・・・謝るから外せ」

進は指を鳴らして氷を溶かした、少年は進を一度睨むと野次馬の下に向かっていつて「すまなかつた」と小さく言つて帰つて來た。

「おい、お前名前は？」

進は一瞬呆気に取られたが笑いながら答える。

「天野進、覚えてくれてたら嬉しいかな」

「ああ、しつかりと覚えておくぜ・・・それと戦いの前に俺の名前がどうとか聞いていたな、俺の名前は鳳成^{おおとせいじ}二別に覚えてなくとも構わない、次会つた時嫌でも覚えさせるからな」

そう捨て台詞を吐いて何処かへ走つていった。

「さてと・・・学校探さないと・・・あつ！－！」で聞けばいつか

といふことで進は野次馬の一人に

「ここいらへんに武陽中学校つていう学校があるって聞いたんですけど・・・知つてませんか？」

するとその人は丁寧に簡単な地図まで書いて教えてくれた。

その人に礼を言う事を忘れずに進は地図通り進んでいると巨大な門までたどり着いた。門には武陽と大きく書いてあり間違いないと分かつた。

生睡を飲み込み一步一步中に進んでいくと外来用と書かれたドアを

見つけた。進は中に入ると窓口に行き中にいた人に書類を渡した。書類を見た中の人人は丁寧に職員室まで案内し頑張つてと言っていた。どんな未知の世界が広がっているんだろうと不安と期待の入り乱れた気分で職員室の扉を開けると中には数人の大人しかいなかつた、きっとあの大人が教師と言つものだろう。すると一人がこちらの存在に気付き近づいてきた。

「君だね転校してくる子つていうのは、歳は・・・十四だね、誕生日は五月だから・・・あつ！！一年生だね、つて資料があつたか・・・ん？うわあ～あの鳳くんのいるC組か・・・ええ～と天野くん忠告しておこう、同じ組の鳳くんにはあまり関わらない様に努力しなさい、後々面倒な事になりますから、おつと話が過ぎたね、じゃあ教室へ行こうか、そつそつ僕の名前は北條時久ほつじゅうときひさゆきつていうから覚えておいてね」

北條といういかにも新米つといった若々しさを感じさせる先生は一通り話し終えると進を連れてC組へ向かつた。

コンコン、と音をたてて

「僕です北條です転校してきた子を連れてきました。」

するとガラガラという音とともにいかにもやる気ありません、といった感じの男が出てきた。

「あ～・・・入つて」

淡白な言葉とともに進は北條に一礼をしてC組に入つていた。同時に

「あつ・・・」

と言う聞いた事あるような声が進の耳に入つてきた。目を向けてみると少し前にあつた鳳成一という少年に似ていた。

「他人の空似つて凄いや、さつき会つた鳳成一つて人に似てるよアハハと笑つている進と声を上げた少年は何故かふるふると拳を握つている。

「お前・・・本人だつ！ほ・ん・に・ん！」

声を荒げている成一を前に進はクスクスと声を頑張つて殺そうと口

を押さえて笑つていた。

「なんだ？お前等知り合いか？」

「一応そういうことになりますかね」

それからは普通の転校生と同じように自己紹介が始まった、まず自

分の名前を黒板に書き、皆の方を向き

「ええっと、天野進です。これから一年間一緒に勉強させてもらひつ
のでよろしくおねがいします」

と自己紹介をした。

それから質問タイムとなつた。

「前の学校つて何処？何で武陽中学校に？」

「前の学校ですか・・・秘密です、それどこに来たのは殆ど偶然
のようなものですね」

「好きな女性のタイプは？」

「一緒にいて楽しい方なら誰でも」

「得意な魔法は？」

「魔法自体あまり得意じゃないので、今のところ無しですね」

その質問の答えに成一が進を思い切り睨みつけたのは言うまでもない
「休日はいつも何をしていますか？」

「僕の前住んでいたところは森の奥深く似合つたのでバードウォッ
チングや昼寝が殆どでした。」

「よし・・・これくらいで勘弁してやれ」

担任である先生が気だるそうに止める

「先生、そういうえば貴方の名前は？」

「言つてなかつたな、おおいじともゆき大石智之だ、よろしく」

簡単な握手を交わした後大石が席を決めようとして先ほどのやり取
りで鳳の隣に決めた。

「てめえには何かと縁があるみたいだな」

「成一が睨みながら言うと

「この縁は大切にしないとね」

と真顔で答えた。とその時成一の耳に風を通じて声が入る。

「成一なんか因縁あるみたいじゃねえか、しめるか?」

同じような声が次々と入ってくる、その全てに成一は回じよつに返した。

「お前等じゃ相手になんねえよ」

返したところで成一は進がこちらに笑顔を向けている事に気がついた。

「な、なんだ?」

「君つて・・・意外と優しいね。旨を護る為に僕に近づかないように言うなんて、しかし転校初日でみんなの敵意を買つなんてなあ」

成一はその言葉に驚愕した

「何で会話がわかつた・・・。」

「簡単だよ、風の通信を掠め取つて聞いたのさ」

この時成一は進が少し怖く感じたがすぐに冷静になった。
そして授業が始まった。

魔法学校ではやはり魔法の授業をやる、一応数学、国語、英語などの基本科目もやるがそれらは週に一、二回程度で残りは魔法の授業に費やされる。魔法の授業は簡単に分けて三つあり、戦闘魔法、非戦闘魔法、魔科学、である。戦闘魔法はその名のとおり戦う為の魔法を中心として教える授業で日々訓練で生徒同士の模擬戦が行われる事もある、次に非戦闘魔法だがこれもその名のとおり戦闘以外の日常で使う魔法を教える授業で治療魔術などが当てはまる。最後に魔科学だがこれは魔力を燃料として動く機械についての授業で原理などを勉強する。

そして現在は戦闘魔法の授業をしているところだった。

大石の長い説明が終わり生徒達全員手元にある簡単な魔術書の写本の教科書を開いている、だが進は来たばかりと/orい教科書の類はおろかノートも筆記用具もなかつた。

「何だ、天野お前教科書渡されてなかつたのか・・・しあうがない隣の鳳に見せてもらえ」

進は言われたとおり見せてもらおうと机を近づけるが・・・成一は一定の距離を保つて離れていく。もう一度近づくと近づいた分だけ離れていく、

「あの、成一くん・・・だよね、見せてくれない?」

進が営業スマイルのような爽やかな笑顔で語りかけると返事のように風の刃が飛んできた、進は笑顔で風の刃を自らが作り出した同じ風の刃で相殺していった、しかし周りの生徒は使っている魔法が風という事もありこの一人の戦いに全く気付かず、唯一気付いた大石も溜息をついて見守っていた。

そんな攻防が一分間ほど続いているとついに成一が折れて机を近づけ一人の机の真ん中に教科書を置いた。そして成一は進の耳元でそつと耳打ちをする。

「いつか覚えとけ」

言い終わると成一は授業に集中し始めた、
(へえ)、不良かなつて思つてたけど授業はちゃんと受けるんだ・
・。)

進は頭の中で変なことを考えつつ、大石の授業はしつかりと聞いていた。

そして授業が終わると成一は進を教室の外に連れ出した、連れて来られたのは誰もいない屋上だつた。そして今まで沈黙をしていた成二が進へ振り返つた。

「おい天野進、お前いつたい何者だ?」

いきなりの質問に少し驚いた進だつたが笑いながら答えた。

「ただの世間知らずの中学生だよ」

進を見る成一の眼光が一層激しくなつたが進はあまり気にしなかつた。

「じゃあその世間知らずが何で俺より魔法が上なんだ? これでも俺は学校でも数少ない天人呼ばれる人間だ、もちろん同じ組にも学年にも天人はいる。それでも俺は組では上位三番までに入る実力を持つてる、学年でだつて同じようなもんだ。自信過剰つてわけじゃない事実だからな、それなのにだ・・なんでお前は俺よりも強い?」成一の勢いは下手な事を言うと掴みかかってきそうな勢いだつた。

真剣な成一の顔を見て進は笑顔を消した、その顔に成一は一瞬怯むが睨み返す。

「別に僕は君より強いわけじゃない、全て偶然勝つだけ・・つて言おうと思つてたけどそんな答え君は望んでいないね、いいよ教えてあげるよ・・・僕に攻撃を一撃でも当てる事が出来たらだけどね」

その言葉を聞いた瞬間成一はバックステップで進との距離を開ける、そして指先に蠟燭の火のような小さな火を十個灯し進に飛ばす、火は次第に一つになつて巨大な火球が生まれる。

「この程度なら、一生知れないかもね」

そう言つて手を振り上げて指揮者が音楽を始める時のように振り下ろす、すると火球は二つに裂かれ進の左右に飛んでいった。そのまま消えるかと進が思つたところで裂かれた二つの炎が小さな爆発を起こす。

「読み間違えた・・・さつきの魔法、最初から当てる気なんてなかつたのか・・・。」

黒煙が一人の姿を隠し屋上は少しの間静寂に包まれる、進は冷静に指を鳴らして風を起こし黒煙を吹き飛ばす、とその時進は成一の魔力が高まっているのを感じる。

（凄いなあ・・・）ここまで計算ずくでやつてくるなんて少し驚かされたよ）

その時、成一の声が屋上に響いた。

「いですよ、風の精霊シルフッ！！」

そして辺りを一瞬透き通った空気が流れたと思つたら成一の隣に中に緑色の服を着た少年が服をなびかせながら浮いていた。

「召喚魔法で精霊クラスを呼び出せるんだ・・・やるじやん。」

素直に進は成一を讃めた、

召喚魔法とは、魔法が解明されていく中で見つけられた魔法でこの世界では存在しない空想上の生き物や物質をこの世界に呼び出す魔法で、呼び出す相手がより上のクラスの者になつてると必要な魔力の量が多くなり、魔法の理論も複雑になつてくる。

クラスが下の順に並べてみると、魔獣クラス、幻獣クラス、精霊クラス、天使悪魔クラスとなつてくる。ただこのパワー・バランスは必ずあつているというわけではなく例外の例として幻獣クラスのドラゴンなどは、精霊クラスと同格の力を秘めているものも存在する。

「こり、こんなところにいきなり呼び出していつたいどうしたんだ！？」

シルフと呼ばれた精霊は自分の呼ばれた理由がいまいち理解できていないらしく必死に成一を問い合わせていた。

「シルフ、今日お前を呼んだのは倒してもらいたい奴がいるからだ、

あそこにいる根性ひん曲がつた馬鹿に自分の惨めさを思い知らせてやれ

シルフは了解したのか』を背中から取り、風を圧縮して矢を作り出しそれを放とうとした。

「だ、誰が・・・。」

何故か進の方が震えていた。

「誰が根性ひん曲がつた馬鹿だつ！――」

その口調はいつもの丁寧な言葉ではなかつた、思いのほか怒つているように見える、いや確実に怒つていた。

「シ、シルフッ！――」

「はいさつ！――」

掛け声とともにシルフの構えていた弓から風の矢が放たれた、物凄い速さで接近する矢は誰の目から見ても進にあたるかに見えた。

「邪魔だ」

進はホントに自然に邪魔な蚊や蟻を払うように手を振る、すると今まで直進していた矢が方向を変え地面のコンクリートに当たり大穴を開ける。

「少しだけ・・・痛い目見てみようか？」

今度の進の顔は笑顔だつたのだが・・・その笑みには感情というものが一切なく見るもの全てを凍りつかせるものだつた。

「ま、待つて・・・。」

成二が口を挟んだときには遅かつた、以前成二が進に向かつて放つた風弾が成二と比較にならないほどの速さと威力で四方八方から襲つた。つまり全方位、風の精霊であるシルフが風では傷つかない事を知つてかシルフの存在を無視した攻撃だつた。

「戦いとは、常に悲しいものなんだよね」

そう言つて屋上を後にする進の後ろにはボロ雑巾のように変わり果てた成二の姿があつた。

§第二話 §パーティー

一日の授業が終わる頃、戦場帰りの敗走兵のような身なりをして成二が教室に帰つて来た。その姿にかなりの同級生が驚いて目を向けていたが、本人はボロボロになつたわけや誰にやられたのかを一切口に出さなかつた。

そして帰りのHR^{ホームルーム}担任の大石は一人一人にプリントを配つていった。

「今配つているプリントは来週の魔法のテストの試験についてだ、これは一人一人で行うものではなく友達と四人一組となり行つてもらうものだ。一年生の時にやつていらない天野のために説明しておこう。この学校の生徒には試験を受け課題をこなす為に、ここではない世界つまりは精霊たちや幻獣たちの住む世界である、コートピアに行つてもらう。ただコートピアは今だ完全に解明された世界では無いので危険が伴う、その為に一定のダメージを身体に受けると学校に強制送還される腕輪を各自に渡す。だがそれでもこの腕輪には範囲があつてその範囲外から出てしまつと装置が作動しなくなつてしまふ、それに一撃で殺されるとやはり作動する前に死ぬのでこちらには死体しか帰つてこなくなつてしまふ。一番気を付けて欲しい事は腕輪を壊したり無くす事だ。そうしてしまつとこちらには救助隊が行くまで返つて来れなくなつてしまふことはもちろんコートピアにいる精霊たちや幻獣たちが腕輪を介してこちらの世界にきてしまうこともある。毎年この試験では数人の死者、行方不明者が出てしまう、十分に装備を整え細心の注意を払つて試験に臨むようになつた大石の顔は真剣そのものだったが話し終えると氣だるそうな顔に戻り簡単な挨拶をしてHRを終わらせ教室を出て行つた。

(さてと四人一組か、一人で行く方が僕好みなんだけど試験だしなあ。それにしてもコートピアか文献でしか見たことなかつたから行くのは初めてだな、なんだかここに来て初めてワクワクするなあ)そんな思いを進が考えていると三人組が近づいてきた。その三人の

中には成一の顔もあつた。

「ねえ進くん、今度の試験私たちと組まない？」

三人組の一人の少女が腰にまで届くかといふような黒髪を揺らしながら進に話し掛けた。

「え？」

素直に進は驚いた、いや進だけじゃない。教室内の三人を除いた全ての生徒達が驚いている。生徒達は小声で「あのC組の三強が・・・」

「転校生つて強いのかな?」「でも転校生も可哀相だなあの人間に狙われたらただじやすまないし」などなど口々に喋っていた。もちろん小さく話していても大気が全ての声を進の耳へと運んでいるので意味がない。

（そういうことか・・・成一くん辺りがばらしたのかな？・・・）

（でも）

「成一めんなさい、僕はのんびりとしたいので」

そこまで言つと

「そうなの！？なら尚更組みましょ、ただの人数合わせだから何もしなくていいから」

（なんですと！？）

頭の中で情報同士が全く繋がらなくなつた、色々と理由を想定していた進だったが少女の口から出た言葉はそれほど予想外の言葉だった。

「で、でも・・・」

進が目をキョロキョロとさせていると成一が少女の肩を叩いて

「おい千秋、^{ちあき}進が困つてゐる。だから俺は言つたんだ進は絶対断るから誘うなつて」

やれやれといった感じで肩をすくめながら言つと千秋と呼ばれた少女はいきなり手を合わせて進の前に膝を付いた。

「本当にお願いつ、他の皆は随分と前から四人組での戦闘の練習のために組んじゃつて誰も余つてないの、転校生の貴方しかいないの」

目を潤ませて頼む千秋、ここまで頼まれて断れば完全に進が悪者になってしまうような雰囲気へと教室は変わっていた。

「はあ・・・わかりました。」

『わかりました』・・・この一言で千秋は一変する。

「じゃあ行きましょう、よし行きましょう、すぐ行きましょう」

そう言って先ほどの顔が嘘のように笑顔になり強引に進の腕を引っ張つて何処かへ連れて行こうとする。

「ちょ、ちょっと・・・いつたい何処に・・・。」

それでもなお力を入れてぐいぐい引っ張る千秋に見かねて今まで傍観していた三人組の最後の一人の少年が一人の間に割つて入り千秋の額を手で突つ張つて押さえる。

「千秋、天野にしつかり行く場所と目的を伝えてやれ」

三人の中では一番人間が出来ているらしくとても大人っぽく見えた。

「あ、東あずま、分かつたから頭放して・・・。」

よほど額を分からず屋の子供を押さえるときように押させていたのが恥ずかしかったのか顔を赤くして千秋は手を叩いた。

「分かつたなら良い」

東と呼ばれた少年はパツと手を放すと元の位置に戻つていった。

「ふう・・・ごめんなさいね進くんあまりの嬉しさについ・・・ね」

一番最初の落ち着いたような感じに戻つた千秋は一呼吸して言葉を紡ぎ始めた。

「これから進くんには私たちと一緒に試験を受ける為のパーティー登録っていうものをしてもらいたいの、でそれを受け付けているのが担任の先生だから今から一緒に職員室に行つてもらいたいの、分かつた?」

「分かつたけど」

「それじゃあ行きましょ」

そして先程よりやや力を緩めて千秋は進を引っ張つて職員室に向かつて行つた。盛大な溜息とともに成二は一人を追いかけ、東も苦笑気味に追いかけていった。

職員室でのパーティー登録はただ紙に名前を書いて担任に提出するという簡単なものだつた。提出するさい担任の大石に進はこれから自分が住む事になる寮の部屋の鍵を貰い、その時初めて寮に住むと いう事を思い出し、炊事洗濯を頑張らなければいけないと心に刻んだ。ここまで良かつたのだが鍵を受け取つたのを千秋に見られてしまい何故か進の部屋で歓迎会を開く事となつた。そして現在コンビニ袋を両手に携えた四人は進の部屋に向かつていた。

「なんで僕の部屋で……」

と愚痴を零しながら貰つた鍵でドアを開け部屋の中に入つていった。部屋の中には未開封のダンボールが数個詰まつていて椅子、机、本棚などの家具が部屋の中に置かれていた。それらの家具には見覚えがあつた。

(僕の家の部屋の家具、父さん母さんありがと)

と感傷漫るのも一瞬だけですかずかと成一は部屋に入るとおもむろにダンボールの一つを開く、中には一本の長剣が収められていた。

「！」これ本物か？』

恐る恐るといった感じで開けた本人が持ち主に問い合わせる。

「その剣は正しい使い方をしないとただの重い鉄の棒だから何にも斬れないよ」

そう説明してから手の平をダンボールに向けて進はダンボールを宙に浮かして部屋の押入れに適当に放り込んだ。

「初級魔法程度なら使えるんだね、魔法が得意じゃないって言つてたはずだつたけど

不思議そうに問い合わせる千秋と千秋の言葉を聞いて顔をしかめる成二、成一はこのままではろくな事にならないと思ったのかテキパキと三人の手からコンビニ袋を取りリビングの大きな机の上に綺麗に並べていつた。

「お前ら変なこと話してないでこっち来てさつさと始めよ!ぜ」

成一の言葉に三人は部屋に上がつていった。

コンビニで買つてきたパンやお菓子を食べる前に千秋が自己紹介を

始めた

「まずは自己紹介をしましょう、私は藤岡千秋、得意魔法は火と雷です。」

(火と雷か、攻撃に優れてるってことか)

「俺は鳳成一、得意魔法は風だ。」

(やっぱり得意なのは風なんだ、まあいっぱい使ってたし)

「俺は八神東^{やがみ}、得意魔法は氷だそれと治療系の魔法もそれなりに出来る」

(性格が出てるって言うかなんていうか・・・合つてる、それにしても治療系は覚えるの難しいはずなんだけどそれをどの位か分からないけど扱えるなら心強いな)

「僕は天野進、得意な魔法は特にないです」

そう喋ると成一の視線が強くなつたのを感じるが進はやはり気にしなかつた。

その後は他愛のない話をして気付けば午後十時を過ぎていた。

「そろそろ帰らないとね」

千秋が時計を眺めながらそう言い、「ミを片し始めると成一と東は立ち上がり食べ物の「ゴミを袋に詰めて片す、片し終わると三人はそれぞれ挨拶をして部屋から出て行つた。

「なんか今日は疲れたな・・・そうだ天剣をダンボールから出しつかないといけないな」

そう呟くと進は押入れのダンボールから長剣を取り出した、鞘からスラリと長剣を抜き放つと進は軽く振るう、長剣の刀身は黒く炭の塊のようだった。何かを確かめるように振った長剣を見終えた進は長剣を鞘に戻すと壁に立てかけた。

(試験まであと一週間、ワクワクして眠れないかも)

そしてニヤリと笑みを浮かべると進はベットに潜り込みそのまま寝息を立て始めた。

第四話 忘れっぽい

進が入学してから二日が過ぎた、この二日間別段特別な事もなく授業中に今日の献立を考える。授業のノートには、ニンジンやらキャベツやらと全く授業とは関係ないことが書かれるようになっていた。
「サラダと日持ちするカレーが良いかな・・・でもカレーばかりじゃ流石に飽きるし・・・」

考え込んでいると進の耳に風の魔法でメッセージが届く

『おい進、今日も訓練手伝えよ』

そのメッセージは成一からだった。この二日間で変わった事は実は一つだけあった。それは成一が進に訓練という名の魔法の模擬戦をさせられている事だった。

進は軽く溜息をつくと成一に『わかった』とメッセージを送り返した。

学校が終わると成一は個人闘技場という魔法の練習用の小型体育館に進とともに来ていた。

「進よろしく頼むぜ」

そう言って進に向かつて成一は構えるが進は自然体のまま「どこからでも来て良いよ」とやる気無さそうに言う、最初に訓練をした時こそ成一は進の態度に不満を漏らしたが一撃も与えられなかつたことと毎度の事で慣れたということもありそのまま向かつて行く、風の魔力を乗せた蹴りが進を強襲するが右手に同じ位の風の魔力を集めて放ち成一の風の魔力を相殺させ半歩下がる、眼前で空を切る蹴りを瞬きせず眼で追い重心となつたもう片方の足を軽く払う、すると自分の蹴りの力に成一は飲まれ転倒してしまった。

「風ばかりを使うのも良いけど少し戦闘経験のある奴にならそれだけだと全部かわされちゃうよ、もう少し弱くても良いから他の魔法も使って翻弄させてから必殺の一撃として使わないとい、後はもう少しフェイントとか入れよう、攻撃が正直すぎるから」

一応訓練としては、ちゃんとやつていいらしくちゃんと直すべきところはしっかりと伝えてくる。成一は黙つて立ち上がると一度進と距離を取るために後方に飛ぶ。

「本当に強いよな、でも何でその強さを誇示しようとしてないんだ？」

成一の問いに進は少し考えて答える。

「僕は別に偉くなりたくて強くなつたんじゃ ないから誇示したいとかは思わないよ」

「そんなもんか、まあ人それぞれって言うからな」

納得したような顔になると訓練を再開した。

一時間後掠り傷と少し汚れた汗だくの成一の前に最初の立ち位置から少ししか動いていない進が疲れた様子もなく立っていた。

「き、きつい・・・。」

「そんなにきつかった？じやあ今日はこれくらいにしつづか」

そう言うと進は個人闘技場を後にした。その後近くのスーパーでカレーの食材を買つと寮に帰つていった、一方一撃も与える事が出来なかつた成一はその場に寝転がると深く溜息をして天井を見つめて呟いた。

「毎回思うが・・・あいつホントに何者だよ・・・。」

そして疲れ果てたのかそのまま成一は眠つてしまつた。

時計が八時を指した時、進はカレーを食べ終わつていた、満足そうにしていると何かを思い出したように壁に立て掛けた天剣を手に取る。

「そういうえば天剣に封印術かけといったんだつたなあ、もう少しで試験だしもしもの時のために解いた方が良いよなあ。」

そう呟くと握つた右手から魔力が溢れ出し剣全体を包み込む

「封印、破碎」

バキッという音とともに黒い刀身が剥がれ落ち純白の色が現れ始める。

「ぐつ、少し封印強すぎたかも・・・。」

唸るように言うと更に進の手から魔力が剣に吸われていく、握る手

の血管が浮き出て進の表情も険しくなっていく。

「魔力吸引の罠術まで、忘れてた・・・。」

(策士策に溺れる?少し違うか・・・。)

自嘲気味に笑うと無理矢理左手を右手に添えて放送出する魔力の量を倍増させる。一瞬部屋全体を剣の刀身が眩く照らす、すると封印も魔力吸引の罠術も消え去っていた。だが進の額には似合わない脂汗が出ていた。

「一応成功したけどこんな危険な事もうやらないと肝に銘じとこいつ。

疲れた進は天剣を壁に立てかけようと手の平を向けて天剣を宙に浮かそうとしたが、

「あれ・・・浮かない」

その時進は恐ろしい事に気付いた。

「魔力が感じない・・・。」

自分の体に起こった異変に驚いた進だったが同時に魔法の基本を思い出す。

(そうか、自分の限界の放出量の魔力を短期間で無理矢理引き出すと体が警告信号を出して魔力を使えなくさせるんだつけ)

初歩の初歩のことだったが魔力の限界値がかなり高い進は今までこんな事を起こした事がなく、初めてのことだったので動搖していた。

「と、とりあえず身体を休めるために寝ないと」

そして疲れ果てた身体を引きずるようにベットに入りすぐに寝始めた。

次の日昨日の疲れを引きずつているのか氣だるそうに教室へ向かい教室の自分の席で寝始めた。

夢の中で楽しい気分に進がなつていると突然頭に強い衝撃を受けて現実へと戻った。そこには戦闘魔学の教師である小川佳子おがわよしこという女教師が学級日誌を片手に進の目の前にいた。

「天野くん・・・私の授業で居眠りするなんていい度胸ね」

「えつ、あ・・・」

「小川ちゃん、進は昨日俺の練習に付き合つてもらつたから疲れてんだ、許してやつてくれ」

言葉を失う進を成一がフォローすると

「鳳くん教師をちゃんと付けしてはいけませんよ！……でも練習したつて言つなら後半の授業の模擬戦でも成果を見せてもらおつかしらね。生徒が努力するのは良い事ですから」

そこまで言つと小川は教室にいる全員に大闘技場と呼ばれる魔法の戦闘用の巨大な部屋に来るよう伝えた。全ての生徒が小川の指示に従い大闘技場に向かつて行つた。

「進も行こうぜ」

成一の誘いに進は眠い目を擦りながらついて行つた。

大闘技場につくと生徒はくじを引かれた、くじは1～20までの番号のついた紙を一枚ずついれた簡単なもので同じ番号同士が戦うといった感じのものだつた。

黙々と生徒達は紙を引いていき進は最後に残った紙を手に取る、紙には8と書かれていた。

「そうね・・・じゃあまず練習の成果を見せてもらつために天野くんが一番最初に戦つてくれる？」

「えー？」

（や、やばい・・・昨日の影響が少し回復して多少魔法が使えるようになつたけどまだつらい・・・）

そういうしているうちに近くにいた生徒の一人が面白半分に紙を取つて読み上げる。

「8つて書いてあるぜ、相手は誰だ？」

すると人込みから少女が一人歩いてくる。少女はなんと千秋だつた。

「同じパーティって事もあるからちょっとは手加減してあげる」

そう言つと言い返す暇も与えず小川が開始を宣言した。

「まずは、小手調べっ！！」

そう言つと火を握りこぶしほどの大きさの玉にして投げてきた。進は上体を反らせて避ける。だが背後に飛んでいった火の玉がターン

をして帰ってきた。

(コントロールできるのか)

避ける事が不可能と思つた進は少ない魔力を振り絞つて水の魔力を右腕に宿して一気に火の玉に叩きつける、すると火の玉は霧散し消えた。

「判断能力が速いんだね、じゃあこれならどうする?」

地面に手を叩きつけると地面が軽く割れその割れた隙間から炎が吹き荒れる、広範囲に広がる炎は完全に逃げ場を塞いでいた。だがその魔法を見た進の行動は早かつた、炎が一番少ない上に水球を放つて間をおかず風の魔法で身体を軽くし飛び上がる、思つたとおり弱い水の魔法で炎を打ち消す事ができ流れ狂う炎が開けた空間を埋め尽くさないうちに飛び出す事にも成功した。下を見てみると自分のいたところまで躊躇していた、そして炎は降りる前に過ぎ去り消えていた。

(勝つためにはもうあまり無い魔力を攻撃の終わつたこの瞬間にぶつける)

そう考へた時には体が動いていた、手の平に風の玉を練り上げる。千秋の炎の魔法に防御されないように風には酸素を全て除外した真空状態の風の玉を作り出し鳩尾を狙つて放つ、やはり千秋は炎で防御しようとするが真空状態の風の玉は炎を無いものと思わせるよう通過していく。真空状態と気付いたのか千秋の顔は険しくなる、だが炎が一瞬揺らぎ一気に消え次に千秋の手の平から閃光が放たれる。

(やば、千秋さんの得意の魔法はもう一つあつたんだっけ・・・。
気付いた時には遅かつた、進は忘れっぽい自分の体質を怨みつつ雷撃により意識を手放した。

『第五話 魔法の種類の授業

暗闇の底から這い出るよつに進は意識を取り戻した、純白のベットの上で痺れの残る体を無理矢理動かそうとせず現状把握に努めた。（覚えているのは、千秋さんと戦つて電撃にやられたところまで…。）

それ以上あとの事は気を失つてしまつたので分からず考へ込んでいると不意に部屋の扉が開けられた、入ってきたのは白衣を着た女性だった。

「あら随分回復が早いのね、一日位氣絶するのが普通なくらいの電撃をもろにくらつたつて聞いたんだけど…。」

「すいません、それよりもここは何処ですか？」

「ここ？ ここは保健室よ」

白衣の女性の言葉を聞いて進は納得したよつに「ああ」と唸つた。「それで何時間寝てました？」

「四時間くらいよ、もう放課後だし大丈夫なようなら寮に戻つて寝てなさい」

「わかりました… 今日はありがとうございました、えつと…。

「天田小百合よ」

「じゃあ天田先生さよなら」

進はベットから起き上ると天田に一礼して保健室を出て行き寮へ戻つた、そして部屋についた進はそのままベットに潜り込み眠つてしまつた。

そして次の日、進は目が覚めるとまず体の具合を確かめた。魔力を身体中に張り詰めさせる、指先から髪の毛の先端にまで張り詰めさせるとフーッと息を吐いて魔力の供給を解いた。

（とりあえず戻つたみたいだ、一時はどうなるかと思つたよ）

気分良く学校へ行く途中不機嫌な成一とあつた、成一は進に近づく

といきなり風弾を放つてきた。不意打ちであったが昨日とは全く違う進にはそんなものは通用せず風弾を研ぎ澄ました風の刃で真つ二つにした。

「ちょ、攻撃するなんてびっくりするなあ

「今の攻撃がさばけて何で千秋の電撃をさばけなかつた？手加減したのか？もしそうなら俺はお前との付き合いを考え直させてもらつ」怒り心頭といった感じで言い寄る成二に進は苦笑するしかなかつた。

「あ、あはは・・・理由言つてなかつたね、ごめんね、実は昨日一日満足に魔力が使えない状態になつててさ、何とか頑張つたんだけど負けちゃつたんだ」

答えを聞くと成二は深く溜息を吐きいつもの表情に戻つた。

「まあいい、お詫びとして今日から訓練のメニューに武器を使うのを追加させてもらうからな」

そこまで言つと成二は学校とは逆の方向に歩いていった。

「武器つていうとやつぱり魔道具なのかな？ま、後で考えれば良いかな・・・。」

そして進は学校に歩いていった。

学校に着くと多数の生徒が進の身体を心配して声を掛けってきたが進はその言葉一つ一つに律儀に答えていた。そして教室に着くとそこには千秋と東が待つていた。

「その・・・大丈夫？」

不安げに声を掛ける千秋に「大丈夫」と進は笑いながら答える、すると不意に東が右腕を掴みじっくり眺める、

「筋肉、骨、その他もろもろ、いずれにも異常は見られないな。安心しろ千秋、進は無傷だ」

その言葉に千秋は安堵の表情を見せ、その後他愛の無い話をした後席に戻つていった。

そして一、二、三時間田ともに魔法以外の基本科目の勉強をして四時間目の戦闘魔学の時間となつた。

小川先生が教室に入ると教室は一瞬で静まり返つた。

「えっと今日は昨日の疲れが皆残っていると思うので基本的な魔法の知識の勉強したいと思います、殆ど的人は小学校の頃の復習となると思うけどしっかり聞いてなさいね、じゃあまずは魔法の大まかな種類から、魔法は戦闘魔法、非戦闘魔法の一いつに分かれている。そして魔法にはそれぞれ属性があり属性によつて戦闘魔法に特化したもの、非戦闘魔法に特化したものがある。属性は火、水、氷、土、風、雷、闇、光の八つがある、次に戦闘魔法にも強さがありその強さによつて初級魔法、中級魔法、上級魔法、究極魔法、異魔法の五つに分けられる。そしてそれとは別に非戦闘魔法の補助魔法、治療魔法、結界魔法、封印魔法の四つがある、だが後三つ種類分けされない魔法がある、一つは召喚魔法。残り一一つは禁術、古代魔法。召喚魔法の方が一般的に広められているのに対し禁術、古代魔法は少数の人間にしか伝わっていない魔法で覚えるのに桁外れの才能と魔力が必要になつてきます。禁術の方は名家と呼ばれる家にしか伝わっていない魔法で有名どころをあげるなら、北の小泉、南の東條、西の十文字、東の遠野、中央の西園寺等の禁術が最強と名高いと言われています。ただ禁術は使用した魔法使いにも多大な危険が及ぶ魔法なので最強というのも噂でしかありません。しかしここ十四年、西の十文字は表舞台には顔を出さず森の奥地でひつそりとしていると言わっていましたが。つい先日沈黙を破つて東京の魔法省に現れたと最近は話題になつていますね。次に古代魔法のほうですが・・・どの文献を見ても不明と言われており、教科書にも不明と書かれていますが・・・私独自の研究の結果、古代魔法がパズルを解くようピース一つ一つを当てはめて数億もの文字の羅列を作り上げる動作を魔法を使う時にやらなければいけない手間の掛かる魔法だということが分かりました。よつて実用的な魔法とはいえない魔法ということです・・・さてここまでで質問は？」

小川先生の話につづいてか生徒全員が夢中になつていたらしくその後の授業の後半は質問で終わつた。

進はテレビを見ていなかつたので十文字が魔法省に現れたと言う話

を聞いて驚いた。詳しく聞くことを思つたが質問を受けている先生に聞くのも気が引けたので近くにいた千秋に聞くことにした。

「ねえ藤岡さん、先生が言つてた十文字のことについて詳しく教えてくれないかな？」

「いいよ、それと藤岡さんじゃ少し他人行儀だから千秋でお願いね」「うん……せめて千秋さんで……」

「まつ、いいかな……それで十文字のことだつたよね？十文字って言つるのは日本の魔法の世界で発言力を持つている五つの家の一つでね、代々魔力を多く持つ人間が生まれる血筋なの、それで日本の西の方を牛耳つてたんだけど……十四年前の私たちが生まれているか生まれる前に西側における発言力を全て魔法省に渡したんだつて、それから全く所在を掴めなかつたんだけどね……丁度進が転校してきた日の次の日に十文字の頭首とその妻が一人が魔法省に現れたの、驚いた魔法省が魔法軍の精鋭が出動して他の四つの家にも応援を頼む始末になつたんだけど、どうやら一人の目的が同じ日にあつた魔法省での教員資格を取るための試験に来ただけらしくつてね、本当にニュース見たときはビックリしたよ……ん？進顔色悪いよ？」

（ど、どうしよう……でもまだ僕が目的つていうわけでもないし、そ、そうだよ！受かつたかも分からぬ）

「なんでもない、それで受かつたの？那人達」

「そこまではプライバシーとかで分からぬよ」

話していると授業終了のチャイムが鳴り昼休みとなつた、と同時に今までいなかつた成一が教室に入ってきた。

「時間丁度だな……よし進弁当買つてきたから飯食おうぜ」

そう言って成一は持つていた弁当を差し出す、進は一瞬戸惑つたが受け取り屋上へ向かつた。

「ねえ東、成一と進つてあんなに仲良かつたっけ？」
千秋の問いかけに

「知らないが……仲が良いのはいい事だ」

と仏頂面で東は答えた。

二人が屋上で昼食をとっていると不意に屋上の扉が開けられた。

「お前等、屋上は俺等が仕切つてんだ勝手に入つてんじゃねえ」

なんともガラの悪そうな男子生徒が三人ほど入ってきた、その三人の中の一人が成二の顔を知つているらしく成二の顔を見てニヤついていた。

「おつと、これはこれは噂に名高い一年C組の鳳成二くんじゃないか、こんなところでお友達と楽しく昼食をとっているなんて珍しいね」

「うるせえっ！…今日は千秋の後をつけ回さなくて良いのか？クズ」「二人の間に険悪な雰囲気が漂つてている中進だけが我関せずといった感じで黙々と飯を掻き込んでいた。

「そういえば君誰だい？見たことないけど……。」

進は最後のエビフライを飲み込むと一息ついて答えた。

「最近C組に転校してきた天野進です。あなた方は？」

「隣にいる一人は覚えなくとも良いよ、でも僕の名前だけは覚えておいてくれたまえ有名になる名前だからね、僕は犬飼冬至いぬかいとうじ、頭脳明晰、容姿端麗、魔法の実力もトップクラス、神に愛された男、だよ」「つまり単なるナルシストって事だ、しかもいつも千秋を追いまわしているストーカーだしな」

そしてまた睨み合いを始める二人、長くなりそうなので帰ろうかと思ふ扉に向かおうとする

「何がストーカーだつ！…僕はただクラスの枠を超えて君達のパートナーに入りたいとリーダーの千秋さんに言う為に毎日追いかけているだけだ。」

「はつ、だつたらもう無理だぜ。そこにいる進が俺等の最後のメンバーだからな」

「なにつ！？」

帰ろうと扉に手をかけたところで進に視線が集まる、そして開けようとしたところで水が左右から襲い掛かる。進は半歩下がつて水を

避け振り返る、そこには刀身の無い刀の柄の部分だけを一本持つた冬至の姿があった。

「君には怨みは無いけど……」ここで大怪我をしてもらひつよ、試験を受けさせないためにね」

そう言つて両手の柄を振り上げる、同時に柄の刀身がある部分に水が集まり水の刀となつていぐ。

「唸れ・・・水龍」

その言葉に反応するように一本の水の刀身は左右から襲い掛かる、がやはり殺す気は無いのかその刀は刃引きがされており先端も円くなつていた。

「面白い武器だね、声に反応して込めた魔力分だけ動くようになっているのかな？それとも召喚魔法で出した水龍の一部を武器についてその恩恵を言葉と言うキーワードで作用させるつて仕組みにさせてあるのかな？」

その言葉を聞いた冬至は一瞬驚いたような顔を見せたが攻撃を続行させた。全て紙一重で避ける進は考えていた、ここで本氣で潰すかそれとも・・・。考えてみると刀身は眼前までしまつっていた、だがそれでも進にとつて脅威ではなかつた、だがその瞬間刀身が全て蒸発し赤い炎が屋上を包んだ。

第六話 戦いの多い日

屋上を躊躇じゅうりゅうした紅き炎は水を蒸発させ終えると一箇所に集まつていった。そしてその集まつていった場所に立っていたのは・・・千秋だつた。千秋は冬至を睨みつけながら進むに歩み寄り手を差し伸べる。

「進、大丈夫？ 怪我ない？」

進は手に浮かんで立ち上ると「大丈夫」と笑いかけた。千秋はそれを見て安心したように微笑むと左手で進を押しやり冬至から引き離した。

「冬至っ！ よくも私の仲間をこんな目に合わせてくれたわね、ここでもうこんな事しないように実力の差と次やつたらどうなるか・・・教えてあげるわっ！！」

「それは怖い怖い、でも千秋さん・・・地上の人への話し方がなってないです。しっかりと身体に刻み込んであげましょう」

会話が終わると同時に冬至は一対の水の刀を鞭のようにしならせ左右から攻撃する、だが千秋は握り拳ほどの大きさの火の玉を回りに十個ほど創り出し冬至の攻撃を無視して冬至に放つた。同時に空高く飛び上がり水の刀の攻撃を避ける、だが水の刀は互いの刀身を千秋の真下で混じり合わせ巨大な水の柱となつて千秋襲う、その時には先ほど放つた十個の火の玉は冬至の眼前にまで迫つていた。冬至は持つていた刀の柄を一つ地面に置き、空いた手を火の玉に向けて手の平に魔力を込める。すると冬至の魔力に従つて手の平に水の結界が現れる、が八発の火の玉の急襲を受けた時点で水の結界は跡形も無く蒸発し残つた二発の火の玉が冬至に炸裂する、思いのほか魔力の込められていない火の玉は大したダメージを冬至に与えないまま消えたが爆発によって生まれた煙により冬至は千秋を見失つていた、操っている残つた一本の水の刀の先を追い詰めた姿の見えない千秋の下へ急いで延ばした、もう片方の水の刀コントロールが途

切れてしまつたせいで一本分の威力を持たない水の柱だつたがどんなに先を延ばしても千秋を捕らえられないのに一種の不安を冬至が抱いた時だつた。先ほどの攻撃で目隠しとなつた火の玉の煙が霧散していくと同時に左手の手の平に真つ赤な炎を放出させ空中を加速しながら近づいてくる千秋の姿を冬至は捕らえた、急いで置いた水の刀を拾うと同時にもう片方の水の刀の水の束縛をいつたん解除しもう一度再構成して短い高密の水の刀身へと変える、そして千秋は勢い良く炎を纏わせた足で蹴り飛ばそうとする、炎と水が互いにぶつかり合い拮抗する。

だがその時冬至は拾つた刀に水を集めると千秋に振りかぶる、がその時一瞬冬至の視線が受け止めている方の刀に移る、刀身はボコボコと音をたてて沸騰していた。冬至が拙いと思つた瞬間受け止めていた刀身は勢い良く蒸発し留め金を失つた炎の足は冬至の鳩尾に食い込み、サッカーボールを蹴るかのごとく冬至を弾き飛ばす。弾き飛んだ冬至は危険防止のための金網にあたり・・・金網が壊れて屋上から地面に落下する。

「なっ！..と、届けえ・・・・」

急いで指先に引っ掛かるように持つていた水の刀を鞭のようにして金網に引っ掛けるが・・・連鎖的に金網は壊れていき多少勢いを無くさせつつも冬至は地面に落ちていつた。驚いた千秋は金網を掴んで落とさないようにするが所詮は女子の力、男子の体重と一緒に落ちていつた金網の重さに耐えられるはずも無く一緒に落ちていきそうになる。そこに成一が先ほどの余つた一人の手下のような者をボコボコにし終わつて周りを見渡し一人の現状に気付き風の魔法で浮かせようとする、だが殆ど落ちている状態の千秋と落ちている冬至、そして一緒に落ちている金網を一気に浮き上がりさせるための魔力を溜めようとするには明らかに時間が足りなかつた。こうしているうちに冬至は地面に落ちていく、そして冬至と地面との距離が二メートルほどとなつたときだつた。澄み渡つた高原の風を思わせる風が成一の背後から吹き、その風は千秋の横を通り冬至まで届く、

すると冬至は地面すれすれのところで静止し・・・上空へと跳ね上がった。跳ね上がったのは冬至だけではなく金網と千秋もだった、が冬至は空中で大気に揉まれるように回転していくこの行動には故意があるのは一目瞭然だった。

呆然と見ている成二に進が近くに来て耳打ちする。

「後三秒後君にこの風のコントロール移すから合わせて・・・三、二、一、零ツ！！」

急な事で慌てた成二だつたが得意の風の魔法ということもあり、難無くコントロールを受け取ることが出来た。とそこでやつと周りを見る余裕が出来た千秋は成二を見て笑いながら

「ナイス成二、おかげで助かつたよ。後でアイス奢つたげる」と感謝を述べていた。当の本人は「やつたのは俺じゃなくて進なんだけど・・・本当のこと言つたら進に怒られるだろうな」と思い苦笑いを浮かべていた。

「凄いね、一瞬でこの人数を浮かべる魔法を使うなんて」と白々しいまでに進が成二を見ながら言つたので成二は少し進との関係をよく考えようと心に決めた。

そして成二はゆっくりと一人と金網を降ろし面倒になりそつたので進の腕を掴むと屋上から逃げるように出て行つた、するとゆつくりと冬至が口を開いた。

「今日は僕の負けのようですね、でも何度でも挑戦させてもらうよ」そう言うと冬至は一人の気絶した部下を放置して屋上から出て行つた。それを見送つた千秋は短く溜息をつき携帯の時計を見て急いで教室に戻つていった。

そして午後の授業も無事に終わり放課後となつた学校の個人闘技場に進は來ていた、用事はもちろん成二の訓練なのだが朝約束したとおり今日は武器を使つた訓練をするらしいので学校で借りた練習用の模擬剣を進は持つていた。剣の素振りを軽くして握り方を確かめながら待つていると十分ほどして長い布を巻いた何かを持つた成二がやってきた。

「悪い、少し準備に手間取つちまつてな・・・つてお前の武器つて模擬剣か！？」

「ただけど・・・成二くんの武器つてやつぱり魔道具なんだよね？魔力の出力の最大値どの位？」

「12000くらいだぜ、凄いだろ？」

そう言って布を取ると出てきたのは蒼い槍だった。蒼穹を思わせるようなその槍の色に思わず見惚れていた進だったが目的を思い出して模擬剣を構える。

「模擬剣つて確か練習用で大量生産されてるやつだから魔力の出力の最大値つて700ぐらいじゃなかつたつけ？」

「そのくらいだね・・・。」

ここで先ほどから話に出ている『魔道具』『魔力の出力の最大値』について説明させてしようと思つ、まずは魔道具、これは魔法の道具のことで魔科学や鍊金術と言われる魔法によつて産まれた魔法を附加させ易くした物や附加させた物の事を指す、次に魔力の出力の最大値だがこれは魔道具の武器に込められる魔力の量の最大値とも言つ、魔道具の武器は込められた魔力を破壊的な魔力へと変化させて放出するため込められる魔力が多いほど戦闘を有利に進められる事となる。魔道具は魔科学や鍊金術によつて作られるのは先ほど説明したが現在の人間が作ることのできる魔道具の魔力の出力の最大値は約4000と言われている。ではそれ以上の魔道具が何故あるのか？それは遺跡から発掘されたからである、古代の魔科学力や鍊金術は現代よりもかなり秀でていた事がこのことから分かる、少し話が逸れてしまつたがつまり魔力の出力の最大値が高いものほど希少な物なの物で価値のあるものなのだ。なのでここで一つの疑問が生まれる、それは何故天人つてこと以外普通の中学生である成二がそんな武器を持つているかということだ。

「その武器つて・・・成二くんなんだよね？どうやって手に入れたの？」

「それは・・・これが俺の家の家宝みたいなもんだからだな」

「家宝?」

「ああ、俺の家つて一応西園寺家の分家でさ……俺の親父は権力争いって言うのには興味が無くて手切れ金っていうかそんな感じでこの魔道具を手に入れたんだ。んでそれが家宝となつて今俺の手元にあるわけ」

「西園寺の分家……」

(西園寺の分家つて、みいちゃんの家そうだつたような……)

「あんまり広めんなよ?俺はあんまりこの事好きじゃねえんだ」

「大丈夫、僕は広めたりしないよ」

「そつか……じゃあ訓練始めようぜ?」

「うん」

そして二人は向かい合い睨み合つた、刻々と静止したままの状態が続き、静寂を破つて先に動いたのは成二だつた。槍に魔力を込めつつ槍を突き出す、そして進が横に飛んで逃げた刹那突き出された槍の先端から小さな童巻が発生し削岩機のように地面を抉る、が槍の威力は止まることなく後方にあつた直径五メートルほどの大岩を粉々に碎いた。

「ちょ、そんなのが当たつたら僕死ぬつて……」

「どうせ結界で防御するんだろ?」

成二は振り向き様に槍を横に難いで巨大な鎌風を作り出す。進は模擬剣に魔力を込め振るう、刀身から魔力の塊が三田月型の斬撃となつて放たれ巨大な鎌風に当たる、が巨大な鎌風は勢いを衰えさせる事無く斬撃を消し去りなおも迫つてくる、進はその様子に動じることなく次々と斬撃を放ち合計七発目で相殺させる事に成功する。

「はあ、最大出力で放つて七発でやつと相殺する事が出来るなんて……これじゃ武器無しで戦つた方がマシだよ……」

たまらず進は愚痴を漏らすが成二は意に介する事無く攻撃を続ける、突いて、払つて、難いで、回す、一つ一つの動きをする度に行動が攻撃となり襲い掛かり。進は結界で防御したり、多くの斬撃をわざわざ放つて相殺する。

「なあ進、わざわざ武器使わなくてもいいぜ？普通に魔法使った方がお前は強いだろ？」

「それは・・・そなんだけど・・・。」

「このままじや勝負にならないだろ？」

「・・・わかった」

進は持っていた模擬剣を投げ捨て向かい合う、あまり構えているよう見えない自然体が進にとつての構え、一寸の隙も見せないよう身体に魔力が満ち溢れ出した魔力が部屋全体を覆う。

（やばい・・・飲まれてる）

成一は苦虫の噛み潰したような顔になり体の重心を低くして身体を落として構える。刹那進が視線を上に移す、すると成一の真上から十数個の火の玉が現れ降り注ぐ。

（視線だけで、目だけで魔法を生み出すなんて・・・進の本気っていつたいどの位なんだ！？）

成一は瞬戸惑つたものの槍を振るつて一つ残らず火の玉を消し飛ばす、と同時に手の平から風弾を放つ、すると進の足元の影が動き出しスッと手を伸ばして風弾を掴み、握りつぶす。

（闇の魔法か・・・珍しいな）

成一は影ごと進を吹き飛ばそうと最初のように槍を突き出す、やはり小さな竜巻が生まれ削岩機のように地面を粉々に抉っていく、進は自分の影の上に手を置くと魔力を込める、すると進の手が手首まで影の中に入り込み影の表面が水面の様に波紋を作り出し影から巨大な影の手が現れる、その巨大な影の手は迫つてくる小さな竜巻に向かつて手を開き、そして受け止めた。激しい衝撃のために辺りは砂煙に覆われる、その時砂煙に人影が映し出される人影は成一だった。成一は勢い良く砂煙を飛び出し進の上に飛び上ると勢い良く槍を振り下ろす、微弱に魔力が宿つていてるようだったが先ほどのような力強さは無かつた。

「魔力が尽きたみたいだね・・・終わりだよ」

そう言つて進は手に魔力を集める、左手には風の魔力を右手には氷

の魔力をそれぞれ集め・・・一気に解き放つ。すると成一に向かって竜巻が巻き起こる、しかもただの竜巻ではなかつた。それは小さな氷の粒がその身を凶器として襲う氷の竜巻だつた。直撃を食らつた成一は槍を盾にしてやり過ごそうとしたが四方八方から襲い掛かる氷の粒にその身を切り裂かれしていく。そして氷の竜巻がやむと身体に多くの裂傷を作つた成一が地面に膝をついていた。

「耐えたんだ、成長したね」

「あんまり・・・うれしく・・・ないな」

そして氣を失つて倒れそうになつた成一を進は支え、進は目を閉じて手に魔力を集中させる。白金の魔力が手を通して成一の身体を包み込んでいく、すると傷だらけ身体から傷がスッと消えていく・・・そして五分後完全に回復した成一を進は満足そうに見てから個人闘技場から出て寮に帰つて行つた。

ついでに成一が田を覚ましたのは日を跨いでからの事だつた。

第一回人物紹介

名前：十文字進こと天野進
じゅうもんじすすむ　あまのすすむ

性別：男

武器：剣

得意な魔法：殆どの魔法を優劣無く覚えているが光系の魔法が一番得意

身体的特徴：通常は黒い瞳、黒髪だが感情が高ぶると目の色が白金色に変わる。結構美少年

その他：本編の主人公で実は名門十文字家の跡取り、彼の実力は現頭首の父親さえも凌ぎ父親との組み手というなの殆ど命がけの戦闘をここ数年はやっており戦闘経験は歳不相応に豊富、実は許婚がありここ半年はその相手の猛烈なアタックに微妙に苦しまれていたりして結構学校生活を楽しく思っている。そしてあまり馬鹿にされた事のない進に悪口は禁句で第一話でそれを言つてしまつた成二は見るも無残な結果になつてている。性格は結構忘れっぽく抜けている、

二年生

名前：十文字好摩
じゅうもんじょま

性別：男

武器：刀

得意な魔法：火

身体的特徴：黒い瞳、黒髪という典型的な日本人タイプ

その他：本編では名前は明かされず父さんや父親と呼んでいた人物で進本人が目の前にいるときには中々感情を表そうとしないが実は母親以上に進を溺愛している、現役時代は睨むだけでその場に業火が舞い降りると言われるほどの火の魔法の使い手で最近までは殆ど

隠居生活に近い生活を送っていたのだが進が学校に入学したため自らは先生を目指し表舞台に舞い戻った。

名前：十文字楓じゅうじもんじかえで

性別：女

武器：無し

得意な魔法：水

身体的特徴：琥珀色の瞳、栗色のロングヘアと少し特殊な容姿を持つている

その他：父親同様本編で名前が明かされないままとなつたキャラクターで本編では母さんや母親と呼ばれていた。進を心から愛しており進の行く末を最後まで見届けようと心に決めた人物、現役時代は戦場の天使と言われていたほど治療系のスペシャリスト、普段はおどおどとしているが決めるところではしっかり決める人

名前：鳳成二おおとりせいじ

性別：男

武器：槍

得意な魔法：風

身体的特徴：黒い瞳に銀色の髪で並よりは上の顔

その他：家を出た進が初めてあつた同年代の少年であり初めて戦闘をした少年、名門西園寺家の分家である事を隠しており信頼できる人には一応話しているらしい（千秋や東など）、不良と言われているが根はそんなに悪い奴ではなくとつき易い性格をしている、ただ少しだけ準人、賢人、天人などのランクを重視しているところがある、そして多少怒りっぽい性格であり単純、進の最初の友達で攻

撃の展開スピードは最高位の風の魔法を得意としている事もありついた学校内での二つ名が『神速の風神』でもともと学年でも屈指の魔法使いであつたが進との訓練で最近ではメキメキと力をつけている。一年生

名前：藤岡千秋
ふじおかちあき

性別：女

武器：金属製の籠手
ガントレット

得意な魔法：火と雷

身体的特徴：黒い目、黒い髪という感じの和風美人

その他：進に関心を示した最初の少女で清楚な感じを漂わせているがかなりのじやじや馬で気に入らない事には言葉よりも手が先に出ると言う性格、その性格からか得意な魔法は火と雷と攻撃的なもので学年でも屈指の実力と攻撃力を持っている。学校内での二つ名は『紅蓮の撫子』でそんな二つ名を千秋自身は嫌っている、普段は温厚だが目的のためにたまに暴走する事もある。一年生

名前：八神東
やがみあづま

性別：男

武器：細身の剣
レイピア

得意な魔法：氷

身体的特徴：茶色の瞳、青色の髪で背が高い

その他：いつも無口で冷静沈着、戦闘中も無表情というキャラクター、暴走する千秋のストッパーの役割りをしており他人とつるむ事は殆ど無く一人でいることが多い、進が転校してくるまでは成二と千秋を含めた三人組で行動する事が多かつたが進が来た事により成

一が進とつるむよつになると千秋との一人つきりを気まずく思い一人つきりとなつた。その事に対し別段進を恨んでいることも無く逆に一人つきりと楽しんでいる。やはり学年屈指の実力者で『沈黙の氷帝』の一いつ名を持つ一年生

名前：犬飼冬至
いぬかいとうじ

性別：男

武器：一振りの水の刀

得意な魔法：水

身体的特徴：金髪碧眼でカツコイイの端っこに引っ掛かる顔

その他：単なるナレシストと思いきや実力は千秋と良い勝負をするほど、親が大富豪ということもあり財力もあるキャラクター、母親が外国人なので髪の色などは生まれつき。学年屈指の実力者で『流水の双龍』の一いつ名を持つ、一年生

名前：大石智之
おおいしともゆき

性別：男

武器：剣

得意な魔法：風

身体的特徴：黒い瞳に茶髪

その他：進のクラスのC組の担任、私生活も仕事中も気だるそうにしている、中々の実力者らしい。

名前：北條時久
ほうじょうときひさ

性別：男

武器：槍

得意な魔法：闇

身体的特徴：黒い瞳に黒髪

その他：新任教師であり実は生徒会こと聖徒戒の担当教師、彼の存在が後々問題となつてくる。

今後出てくるキャラクター

名前：天草義輝あまくさよしつる

性別：男

武器：大鎌おおがま

得意な魔法：光と闇

身体的特徴：黒い瞳に黒髪

その他：聖徒戒の会長で学校の誰もが恐れる最強の名を持つ生徒で『闇夜の死神』という二つの名を尊敬と畏怖の念を込めて呼ばれている、だがその二つ名と本人は全く違う優しい青年、だが学校側から任務と呼ばれるものを命じられると従順に従う、その行動は彼が学校を良くしたいという心の表れであり自分が任務をこなすたびに学校が良くなっていると信じている。三年生

名前：相澤詩歌あいざわしきか

性別：女

武器：弓

得意な魔法：水

身体的特徴：水色の瞳、白い髪でかなりの美少女

その他：西園寺家の分家の娘で進の許婚、性格は温厚であるが行動派という感じで進を追つて武陽中学校に入学した、彼女は進に恋しており、進自身も彼女に好意を寄せているが二人とも相手の想いには気付いていない。また弓の名手でフォローがとても美味しい。二年生

他にも色々人が出できます。

第七話 学園最強の生徒

そしてついに試験前日となつた、周りにいつもと違う気配を感じつつ進は学校へ登校した。教室の中に入つてみるとよりいつその違いが感じられた、クラスメイト一人一人の視線が分厚い魔術書の写本に注がれており新しい魔法の概念を覚えたり再確認しているようだつた。進もその雰囲気に圧され自分の席に座ると両親から送られてきたまだ遺跡から発見されて間もない解説もされていない魔術書の解説を始めた、解説の作業に夢中になっているといきなり肩を叩かれた、振り返つてみるとそこには成二の姿があつた。成二はいつも一時間目か二時間目が終わつてからフЛАリとやつてくるのだが今日は朝早くからやつてきたので進は少し驚いていた。

「なあ進、その本つてまだ解説されてないみたいだけど何処で手に入れたんだ？」

油断していた為か隠すのを忘れていた魔術書を見つけられて言い訳を考えていると、

「まあいいや、それより今日千秋が俺とお前と東で試験直前の戦闘練習をしようって言ってたんだけど参加するか？」

深く問い合わせてこなかつた事に安堵した進は笑つて答える。

「良いけど・・・あんまり僕の実力知られたくないからかなり手加減するよ?」

「それが良いと思うぜ、前の模擬戦で千秋は進のこと魔力の少ない頭の回転が少し速い奴程度にしか感じていらないみたいだからいきなりお前の本気見たりしたら過剰に反応して激しく暴走しそうだしな」

「うん・・・そうだね、それで何時から何処でやるの?」

「時間は放課後の部活が終わつた時間、千秋も東も部活に入つてからな、大体六時ぐらいでいいと思う、場所はいつも一人で訓練している個人闘技場だ、わかつたな?」

「わかつたよ」

話していると朝のH.R.の始まりのチャイムが鳴り一分ほどしてから大石が入ってきた。そしていつも通りの授業が始まると思ったが…。

「今日一日明日が試験日ということもあり全て自習とする…以上朝はこれまで」

一通りの挨拶を終えて大石が出て行くと同時に生徒が一人一人違う行動に移った。ある者は朝と同様魔術書を読み始めたり、またある者は仲の良い友達とともに個人闘技場へ模擬戦に行ったり、そんな中進は図書室へ行き解読をしていた、ふと周りが異様に静かに思い見渡してみた図書室は不思議と人が自分以外に青年一人しか居らず快適であつたが試験前だったので逆に無気味に思えた。だがすぐに無駄な事を考えるのをやめて進は黙々と解読を進めていった、二時間ほどで二十頁ほどの解説を終え一息つく、すると突然背後でパチパチと拍手が聞こえた。

「解説しちゃうなんて凄いね、君つて見たことないけど転校生なんか？」

先ほどまで少し離れたところで本を読んでいた青年が背後で進の解説していた魔術書を覗き込みながら言ったので進は警戒して魔術書を抱えて距離をとつた。

（いくら油断してたとはいえ気付けなかつた！？）この人…何者だ？）

「そんなに警戒しないでよ、別に危害を加える気なんてないし」

「貴方はいつたい何者ですか？」

「僕は聖徒戒せいとくいの生徒会長あまくわいしゃよしてるの天草義輝」

「聖徒戒？」

「ああ、聖徒戒って言うのはこの学校の実力者のみで構成される風紀を守る人たちの会でね、簡単に言えば生徒同士の暴動ややり過ぎた行為を鎮圧せたり止めたりする役割りの人のことと言つのさ…」

・その様子じゃ一つ名についても知らないみたいだね？」

「はい、知りませんけど」

「じゃあついでに教えてあげるよ、一つ名つていうのは学園内の強い者につけられる別称でね、この学校では・・・二十四人いるかな」「色々と教えてありがとうございました、では僕はもう行かせてもらいます」

なんとなくここには居たくないという気分になり事務的な挨拶だけ済まし図書室から出て行こうとすると・・・。ガシリと手を掴まれ引き戻される、少し礼儀がなってないと思い振り向き様に拳を突き出しだが・・・手首を掴まれ身動きが取れない状態となる。

「意外と乱暴だね天野進くん、いや十文字進と呼んだ方がいいかな？」

十文字という単語を聞いた瞬間身体の表面に電流を流し義輝を振り払う。だが義輝は攻撃が当たる直前に自ら手を離し電流を回避していた。

「危ない危ない・・・電流を作り出す素振りなんて全く見せなかつたけど、まさか思つただけで作り出したのかい？」

「貴方に言つ義理はないと思います、それよりも僕の素性・・・どうやつて知りました？」

「秘密」と言つても無理にでも聞き出そうとするんだろう? しうがないから今から個人闘技場で僕と一戦交えて勝てたら話してあげるよ」

「分かりました」

そのまま一人は何の用意もせずに個人闘技場へ向かつた、途中で訓練している生徒達の視線が集中しているのに気が付いたが別段気にしないで個人闘技場へとついた。

「今回の戦いは僕と君だけの戦いだから写真もビデオも撮つてない、要するに周りの目を気にしないで思いつきり掛かつて来なつて事だよ」

「後悔しても・・・知りませんよっ!...」

進は向かうあうと同時に一瞬で加速し義輝に飛び掛かり両拳に赤い

炎を纏わりつかせ一気に勝負に出た。

(情報を探し出す為に・・・少し手加減して・・・。)

後一步踏み出せば拳が当たるというところで義輝は動き出した、上体を斜めに反らし一発目の拳を交わすとカウンターの要領で進の顔面に拳を突き出した、避けられる思つていなかつた進は慌てて手を引き戻し防御しようとすると間に合わず義輝の拳が進の鳩尾にめり込んだ。

グハッと口から少量の血を吐きながら前のめりに倒れこむ進を義輝は興味なさそうなめで見ながら倒れた進に向かつてこう言い放つ。「所詮は良い所の坊ちゃんか・・・少しは楽しませてくれると思つたんだけどね。ハア、これで後継者探しも最初からやり直しかな」そして出入り口から出て行こうとする義輝が一步踏み出した時だつた。

「待てよ・・・。」

声に誘われ振り返つてみるとそこには倒れたはずの進が立ち上がっていた。

「あら、一応本気で殴ったんだけどもう復活しちゃつたんだ。でももう無理しないで良いよ、傷つけて悪かった・・・感謝料なら後で聖徒戒に請求書を送つて・・・。」

義輝の言葉は途中で終わつた、何故なら田の前にいる進が先ほどとは別人のような気迫を纏つていたからだ。

「僕は今この学校で貴方に逢えて少しだけ良かつたと思つています、だつてこのまま僕がこの生活を受け入れ続けていたら戻れなくなつていたと思いますから、でも貴方は僕に戦場を与えてくれました・・・。先ほどは見苦しいところを見せてしまってすみません。これからが・・・これからが僕の本気ですから」

そう言つて義輝を見据える進の瞳の色は黒から白金へと変わつた。

直後今度は義輝が走り出した、足元の影から五本ほど針が伸び進の上下左右と正面から襲い掛かつた、進はバックステップで全ての攻

撃を交わしたがそれは義輝がわざと残しておいた逃げ道だった。進の背後には影で出来た巨大な剣が迫っていた、進はまるでそれが待つていたことが分かつて、いた様に背後も見ず、左手をかざす、すると進の左手から光の粒子が放たれ一秒も経たないうちに巨大な剣を消し去った。

「うわあ・・・光系も使えるんだ、これは僕にとっては天敵だな」困つたように言つているが義輝の顔は全く困つていなかつた。

「じゃあ僕も本気を出すよ？」

そう言つて影の中に手を伸ばし何かを掘むと引き出した、引き出された手には大きな鎌が握られていた、戦場に立つその姿はまるで死神を連想させるものだつた。

「武器使って良いなら僕も使わせていただきますよ」

進はそう言つと指を噛んで傷を作りそこから滴つた血を地面へと垂らした。すると垂らした場所が光り輝きだし辺りを光で覆い隠した。

「この光・・・やっぱ轉送魔法か」

転送魔法とは召喚魔法の小さく分かれた種類の一つで物体を呼び出したり送つたりするのに使う。この場合は進が呼び出すものと血の契約を交わしており垂らした血によつて物体を呼び出したと思われる。

光が收まるとそこには天剣を持った進の姿があつた、天剣を見た義輝は一瞬驚いたような顔をしてから感心したように天剣を眺めていた。

「放出系壱の剣、魔破^{まほ}・・・」

眺めていた義輝を無視して進は天剣を両手で持ち肩に構える、

「斬^{ざん}!!」

と言い放つと同時に振り下ろした天剣の刀身から魔力の塊が放たれ地面を削りながら義輝に迫つた。義輝は避けずにその場に止まると大鎌を振り上げ無造作に魔力の塊を斜めに刈り取つた。刈り取られた魔力の塊は嘘のように消えその場に静寂が訪れた。

「なかなかの魔力を込められてるみたいだけど、そんな手加減をし

たままの攻撃じゃいつまで経っても僕に攻撃を当てる事は出来ないよ」

進はチッと舌打ちをすると目を閉じる、小さく何かを呟いているようだが耳で聞き取れるようなものではなかつた、だがそれを見た義輝の顔が先ほどのような余裕が失われており大鎌を構えて凄い形相で襲ってきた。

「今から使つても彼の方が展開は速い・・・ならつ！！」

さらにスピードを上げて進に義輝は迫る、構えていた大鎌の刃の無い柄の部分で進の足元を狙う、が振り下ろしたその場には進の姿は無かつた。

「光系古代魔法レクイエムか・・・。」

そう言つて見上げる義輝の頭上には巨大な白銀色の光で創られた十字架が現れていた。義輝は避けられないと思つたのか大鎌を地面に突き刺し周囲の影を大鎌に集め始めた。

（完全に無傷で受けきるのは不可能だ、なら・・・どうにかして威力を外に流すか）

そして影を吸收して三倍ほどに大きくなつた大鎌を義輝は正面に構えた。その時にはレクイエムの発動準備は完璧に出来ていた、そして十字架の交差している部分に進が現れる。突き出した左手には天剣が握られておりその切つ先にレクイエムの全ての魔力が集中しているようだつた。次の瞬間、天剣の先から光の閃光が放たれ義輝を襲う、歯を食いしばり手の平を血だらけにしながら大鎌を力強く握り威力を必死に堪えながら回りに精一杯衝撃を流していた。義輝の足は五センチほど地面にめり込みもう少しで靴が全て陥没してしまうところだつた、その時閃光が放たれるのが途絶えた。

「耐え切つたぞ・・・！？」

全てを耐え切つたと思った義輝の考えは甘かつた、進の持つている天剣の光は失われていたもののその背後にある白銀色の十字架は今なお健在であつた。

「これが本当の・・・レクイエムです」

進の咳きとともに十字架が義輝目掛けて落下した、地面に十字架が触れた瞬間辺りは閃光に包まれ十字架は大地と空を射抜く光の柱となり数秒間その姿を保ち幻のように消えた、レクイエムのあまりの威力に個人闘技場の結界は消滅させられ天井と闘技場の地面には十字架型の大穴を開ける結果となってしまった。回りを砂埃が覆っている中、天井の穴から一人少年が飛び出した。その少年は一度闘技場の方へ目をやるがすぐに視線を戻し寮の方へ消えていった。

そして闘技場の地面の十字架型の大穴の横には仰向けに天井を見たまま笑っている義輝がいた、騒ぎを聞きつけた先生や生徒が集まる中義輝は先ほど出て行つた進のことを考えていた。

（わざと外したなあ、もともと言ひ気が無いから約束なんてどうでも良かつたけど・・・彼にならこの学校を任せても良さそうだ。でもそれはそれ、これはこれつてことで今度やる時はなんとしても勝たないとなあ）

その顔には清清しい笑みが浮かんでいた、それを見た回りの生徒は口々に「あの『闇夜の死神』が笑つてる・・・」「この人間離れした破壊力・・・流石学校最強の『闇夜の死神』だ」「見るの止めとけ、あいつは所詮学校の犬だ」などなど、聞こえてはいたが義輝はどうでも良かつた。そこに一人の眼鏡の似合つた女子が歩いてくる。

「会長、ここで何がありましたか？」

眼鏡を一度上げてから聞く、どうやら癖の様だ。義輝は立ち上げると色々な意味を含めた笑みを浮かべて

「育てたらものになる仔犬を見つけたと思つたら、とんでもない狼だつたよ。」

と言つた。一瞬呆然としていた眼鏡の女子だったが、何の答えにもなつてない事に気付き更に問いただそうとするが、間に合わず義輝は逃げるようになつて行った。

その頃進は学校に戻るかこのまま寝るか考えていた、考えているとあることに気付き時間を見る。

「ヤバイ・・・皆との約束の時間だ・・・。」

そう時計は六時を指していたのだ。

所々傷が痛んだが進は身体に鞭打つて個人闘技場へと走っていった。

§第八話 §執行部

やつとの思いで個人闘技場にたどり着くと館内から戦闘音が聞こえた、急いで中に入ると目の前から火の玉が飛んできた。突然のこと驚いたが上体を無理矢理ひねって紙一重で避ける、数センチ横を火の玉が通り過ぎ髪の毛が少し焦げる、と同時に子の魔法を放ったであろう少女から怒号が飛ぶ

「何避けてんの！！時間に遅れた罰なんだからしつかり受けな・・・
さ・・・い・・・つて進だつたの！？」

放つた本人である千秋は口をあんぐり開けてポカンとしている、どうやら進と誰かさんを間違えたらしい、そして間隔をあけずに

「オイーッス！…」

と挨拶をしながら成一が入つてくる、その光景を見ていた東はやれやれと肩をすくめて首を横に振っていた。先ほど以上の危険を感じた進はその場から退避し東の横に立つ、状況が理解できていない成一は戸惑いを見せていたが目の前に強烈な魔力の気配を感じで身構える。そこにはいつもの三割増の暴走を見せる千秋がいた、その手には炎が灯つておりまるで今の心情を表すように手の平で暴れ回っていた。

「この・・・」

「ん？」

千秋の小さい呟きを聞き取る事が出来ず聞き返す

「この・・・ばかあつ！…」

そして千秋の絶叫にも似た叫び声が辺りに響く、同時に手の平で暴れ狂っていた炎が直径五メートルの炎の塊に肥大化し成一に襲い掛かった。いきなりの攻撃に慌てた成一だったが二つの風の刃を放ち相殺しようとするとが・・・。

ボオオという音とともに風の刃は飲み込まれ逆に炎の大きさと勢いが強まつた。

(やばいな、半端な攻撃は逆効果だ)

本格的に打つ手無しとなり防御の姿勢をとる成二、何故か我を失つて暴走している千秋にはそれが分からず攻撃を続行する。だがその時成二の前に厚い氷の壁が立ちふさがった、

「そろそろ正気に戻れ千秋」

そう言って東は二人の間に割って入った、すると先ほどまで暴れ狂っていた炎が嘘のように治まっていく、進はその様子を見て東がとても凄い人に見えた。

「い、ごめん・・・。」

それはもう芋虫のように小さくなつて千秋は謝つた、成二は殆ど呆れ顔になりながらも「もういい」と頭を搔きながら言つた。

「何はともあれ、さつきはさつき今は今だ。早速訓練を始めるぞ」成二はそう言うと指の関節を鳴らしながら部屋に中央に向かつた、そして言葉を交わす事無く東も中央に向かつて行つた。そして一呼吸置き二人は向かい合つた。

「ねえ千秋さん、あの二人なんか妙に慣れてるんだけど」

進の質問に

「まあいつも訓練はあの二人の手合わせから始まるからそりや慣れちゃうよ」

と一人を眺めながら千秋は淡々と答えた。

そして進が目を離しているうちに手合わせは始まった。

先に突っ込んだのは成二だった、向かい合つてから一一秒と経つてないのに両手には高密度の空気の塊が作り出されていて、展開と攻撃双方の速さが全系統の魔法の一風系の魔法を得意とする成二だからこそこえる最速の一撃といえるだろう。東は氷の刃の生成を半分ほど行ったあたりでいつたん生成を中断し生成した氷を握りつぶした、そして粉々になつた氷を突っ込んでいた成二の顔に投げつける。成二は今の速さを維持したまま突っ込めば氷によつてこちらも被害を受けると思い速さを緩め腕で顔を防御した。腕に冷たい物が触れる感触がする、と同時に腕でその感触のもとである氷の粒を一気に

振り払う、だが拓けた進路上には東の姿は無かつた。

後方左斜め後ろの方向に微弱な魔力の流れを感じる、前々から戦いの中で狩人の如く鋭敏な感覚と天性のバトルセンスを見せていた成二は、進と毎日行う戦闘訓練により鋭敏な感覚をさらに磨き上げ、魔力を使って風を操り周りを観る方法を教えていた。それにより段々と迫つてくるものを後ろ向きのまで感じとれた。約三秒後に成二を襲う攻撃、振り向いてから反撃しては間に合わないだろう。そこまで考えた後の成二の行動は早かつた、先ほど使わなかつた両手の高密度の空気を地面にぶつけ粉塵を起こす。そしてその場に止まる事無く飛び退き東の攻撃を避ける、最後までどんな攻撃をしてきたかわからなかつたがビュオッと横を通り過ぎる音を聞く限りかなり巨大な質量のものと推測できた。だが今はそんな事を気にしない、しかし万が一ということもあり一応忠告をしておく。

「気を付けるよ」

（千秋の近くには進がいるからまあ大丈夫だろう・・・それに時間が無い）

そして成二は自身の周りに風で結界を張ると両手を前に出して結界の外に小さな小さな火花を起こす。その瞬間辺りを轟音と衝撃波が蹂躪すし地面を抉りながら煌々と燃える紅色の炎が結界を張る成二の辺りを通り過ぎる、爆風が収まつたところで結界を解く。

「話に聞いてた粉塵を利用した粉塵爆破、こ、ここまで威力あるとは・・・」

あまりの威力に呆然としていると目の前の煙の中から氷の弾丸が放たれ、成二は身体をひねつて避ける。そして煙が晴れるとそこには片膝をついてぼろぼろになつた東の姿があつた。

「ま、前とは動きが格段に上がつたな、背後からの攻撃で決まったと思ったが・・・何で避けれた？」

「俺には有能なコーチがついてんだよ」

そう言って成二は不適に笑いながら進の方向を見た、進は目線を逸らして頭を搔いていた。そして千秋が目元を吊り上げて怒っていた。

「あんたなんて攻撃をこんなところで使つての…」進が死んじゃうじゃない！」

成一は千秋の怒りに

(いやあ、進は全く心配してなかつたし)
と心中で苦笑しながら思つていた。

そしてどうやら戦闘はこれで終わりらしく一人は一礼して中央から下がりそれぞれの傷の手当をしながら自らの反省点や良かつたところなどを話し合つていた。話しあると成一は進の所へ満足げな顔で行き自慢げに小さな声で語りかけた。

「どうだ強くなつただろ?」

自信満々に話しかけた成一の思いとは裏腹に進は溜息混じりに答える。

「最初の相手の反撃の時に片方の風の玉で攻撃を弾き飛ばしたらもつと早く終わつてたかな、それに展開が遅いよ…しかも人を氣絶させるのにあんなに魔力を込めた風の玉はいらないし」と批判ばかり受けた成一は肩を落として戻つていった。そんな成一を会話の内容を知らない千秋は殆ど無視してパチパチと手を鳴らして視線を注目させた。

「さてと、一人の戦いも終わつたし、今度は誰と誰が戦う?私と進は授業で戦つた事あるし…進と成一が戦つてみる?東はさつきのダメージぬけてないみたいだし」

その言葉を聞いて進はあからさまに嫌な顔をして成一の目はキラリと光つた。

「僕は…やりた「おお…そんなにやりたいのか進、なら戦おうぜ」「うぜ」

と成一は大きな声でわざと声を隠すように言い進の腕を引っ張つて中央まで連れてきた。

「お手柔らかに頼むぜ…進

そう言ってニヤリと笑う成一を見て進は手をグッと握つていた。
(成一くん…きつと僕が本気でやらないって言つたからだらう

(な)

そしてセリフしている間に戦闘が開始された・・・のだが、ガツという音とともに開かれた扉から入ってきた人達のせいで戦闘は中断された。その人達は共通して腕に『執行部』と書かれた腕章をつけていた。

「お前たち・・・聖徒戒の・・・」

成一は憎々しげに言い千秋と東は驚いて目を見開いていた。するとその人達の中でも背の高く体格の良い男子が歩いてきた。

「こんなところで何をしているんだ!!」

男子のいきなりの怒号に驚いた千秋だったが眉をひそめて言い返す。

「見て分かりません?明日のための練習です。」

互いに一步も引かない睨み合いが続く中、進はなにやら考え込んでおりムーっと唸っていた。と思いつや顔をパッと上げ先ほどから考え込んでいた疑問を体格の良い男子にぶつけた。

「えっと・・・それで貴方達は何者なんですか?」

その質問を合図に全ての腕章をつけた人達の視線が集まつた、特に質問をぶつけられた男子の視線は近かつた事もあり非常に怖かつた。「ん?見たことない顔だな・・・誰だ?ブラックリストにも載つてないし・・・」

まじまじとさまざま角度から見られては片っ端から男が名簿をチエックしていく一つのページで止まった。

「なんだ転校生か、なら知らないのもしょうがないな。我々は聖徒戒と呼ばれる組織の執行部と呼ばれる役職を担当している者だ。そして俺が執行部の全てを任せられている三年の宍戸拓真しつどたくまだ。覚えて置いてそんは無いから覚えておくが良い」

凄く偉そうな喋り方する奴だなあ、と進は思つたがせつかく説明をしてくれているので黙つて話を聞いていた。

「そして素行に問題のある奴等を取り締まるというのが執行部の役割りだ。そして君の周りにいる三人はブラックリストにも登録されているほどの問題児共だ。学園の中で数少ない二つ名持ちだという

のに聖徒戒には入らない、逆に邪魔ばかりする・・・おつと二つ名つて言うのはだな「二つ名については知っています。丁寧な返答大変ありがたかったです・・・ですけどなんで聖徒戒に入らないといけないんですか？そもそも聖徒戒のやつてる事つて正しいんですか？」僕の知り合いに聖徒戒の人がいますが・・・その人のやつた事が僕は良い事だとは到底思えない。でも彼等は違います、いきなり屋上に呼び出して戦わされたりする人や時々暴走する人やあんまり考てる事がわからない人達ですけど心は優しいと自身を持つて言えます。つまり・・・

一呼吸置いて息を溜めて大きな声で進は拓真に向かつて

「貴方達なんかよりもよっぽど彼等の方が信用できるんですよ！」

と言い放った。

その言葉に拓真は怒り、左手に電撃の溜め放とうとした。だが不意に巻き起こった突風により背中から倒れてしまう。

「よく言つたぜ進、流石は俺が見込んだ男だな」

成二がそう言つて風で浮かびながらスタッフと進の隣りに降り立ち「そうね・・・好き勝手に私たちの事馬鹿にした時はどうしてあげようと思つたけど・・・やっぱり最高ね」

千秋は笑みを浮かべて親指を立てて言つと極大の大きさの火の玉を作り上げ執行部目掛けて投げた。流石に他の魔法使い達との戦闘に慣れている執行部らしく素早く結界を張つて対応するが・・・

「あまいよ・・・それは私の炎つて事忘れてない？」

炎は結界ごと執行部の連中を地面に沈めていき・・・上半身半分ほど埋まつたところで炎は消えた。

「最後の後始末をする俺の事も考えてくれないか？」

その呴きとともに辺りは一面の氷の世界となり、執行部の連中は下半身が氷で埋まつてしまつという結果となつた。そして千秋は進の隣りへ東は成二の隣りへ行き惡々しげに睨む拓真に向かつて成二が最後にこう言い放つ

「どうだ、最高のパーティーだろ？」

そして成一、千秋、東は満足げに出て行つた。そして進は少し可哀相な気もしたが一礼して出て行つた。

「ブ、ブラックリストに天野進を・・・追加しなければな」そして朦朧とする意識の中、根性でブラックリストにその名前を書き終えると拓真はそのまま意識を失つた。

一方進たち四人は帰り道、進のセリフが良かつただの、私はそんなに暴走しないだの、巻き込んですまないなど色々話し、寮が近づいた辺りで解散となつた。

進は自分の部屋に戻ると作り置きしておいたカレーを温めなおして食べ、腹を満たすとすぐに寝てしまった。

とうとう明日は試験の日

第九話 試験開始

午前五時という早朝、武陽中学校の寮の辺りでキュツキュツと擦るような音が響いていた。

音の原因は一人の少年がベランダで白い刀身の剣を磨いているのが原因で、実はかれこれ一時間ほど磨いていたりする。そこで一度音が止む、見ると少年は満足げに太陽に向かって剣を掲げ光らせていた。

少年は剣を鞘に入れると部屋に入り今度はリュックサックを取り出してきた。リュックサックにはきつちりと物が入っているらしく重みを持っていた。少年は部屋の中心にある机にバックを置くと中身の確認を始めた。

缶詰、缶詰、缶詰、缶詰、缶詰、レトルトカレー、缶詰、缶詰・・・出しあると机の上には缶詰が山のように並んでいた。少年は満足そうにそれを眺めると再びリュックサックに戻していった。が突然少年の手が止まり台所へと走っていく、数秒後戻ってきた彼の手には缶詰りが握られていた。

「危ない危ない、もう少しで缶詰を食べれないところだつたよ・・・」

そして黙々と缶詰を入れていき・・・全てを入れ終えた。

「もう忘れ物は・・・あつ！・！」

少年は思い出したようにたくさんのダンボールの中から一つを開け大きな壺を取り出した。壺の中には白い玉がたくさん入っていた。少年はその玉を一つ取り出して巾着のような小さい布製の袋に入れる。

それをポケットに入れると磨いていた剣を腰に携えリュックサックを背負い勢い良く部屋を出て行つた。玄関の扉が閉まる一瞬少年の口から言葉がこぼれる。

「今日は待ちに待つた試験の日だ・・・。」

そう・・・今日は武陽中学校の試験の日なのだ。

少年こと天野進は走っていた。それはもう凄い速さで走っていた。ここで注意だが彼は遅刻をしているわけでも、誰かと約束をしているわけでも、まして誰から逃げているわけでもなかつた。それでも彼は走つていた・・・その顔に笑みを浮かべて。

腰に携えた天剣が地面にあたりカツンカツンと規則正しい音を鳴らしていた。だが進はそんなこと気にせず走つていた。彼の目線の先には武陽中学校の校庭があつた、進は校庭に入ると徐々に速さを緩め・・・止まつた。

校庭には誰もいなかつた、まあ当然といつたら当然なのかもしけない、カチッという音とともに学校についている時計の針が一つ進む、時計は六時を指していた。

そこで進は苦笑交じりに一言呟いた。

「ちょっと速すぎた・・・かな？」

ついでに試験の開始時刻は八時・・・でもこのことを進は知らない。「まあいいや・・・教室で寝てよ」

そう言つて進は教室に向かつて行き・・・自分の机で寝息を立て始めた。

進は周りの音で意識を覚醒させた、覚醒したてでぼんやりふわふわした感じの意識を頬を挟むように叩く事で無理矢理最高の状態まで覚醒させる。そして音のする方に耳をすませてみた、人がたくさん集まつた時に起こる特有のガヤガヤした感じが校庭から感じられた。そこで初めて進は教室に備え付けられた円い時計を見た。時間は八時を指していた・・・。

「一時間ぐらい寝ちゃつたんだ……あつ！試験始まつてるかもつ！」

そこまで口にすると進の行動は早かつた、寝るために脇に置いておいたリュックサックを背負い進は校庭に向かった。

校庭に着くと初老の男性が皆の前で話していた、どうやらこれが話しに聞いていた全校朝礼という一種の儀式的な習慣なんだと進は悟つた。

とそこで進は成一達の姿を発見する、成一は眠たそうに大きな欠伸をしていて、千秋と東はしつかりと初老の男性の話を聞いているようだつた。

進は姿勢を低くして三人に近寄つていぐ、ところが

「では・・・皆の帰還を心より祈る」

という言葉とともに先ほどまで何も無かつた校庭の地面に幾多もの古代語の羅列が浮かび上がる。

そして・・・校庭に集合していた全生徒が校庭から消えていた。

移動した・・・そう理解するのに進は時間が掛かつた。今まで見したこともない古代魔法、それも魔方陣という古典的で時間の掛かる手法で行つたと言う事・・・進は荒野の中で考えていた。

他の生徒達は自分のパーティーと思わしき人達と集まつてそれぞれ別々の道を進んでいく。

(考えるのは後だ・・・僕にはまだ時間はある)

そこまで考え進はしつかりした足取りで三人の下に向かつて行つた。転送魔法(?)による移動で一時見失つてしまつた進だが、皆がある場所から離れていくので場所を割り出す事は簡単に出来た。

「でも・・・なんでこんな事になつているのかなあ？」

そう言つて進は溜息を吐くと田の前で起こつてゐる睨み合いを見た。頭を抱えでどうしようか考える東に、やるならやるよ?とでも言い

たそうな目をしている千秋に、もはや臨戦態勢に入っている成一、相対して三年と思わしき少し自分達よりしつかりした体格の五人、その光景を見ていて進は（なんで僕の周りってこんなに戦いが多いんだろ?）と思つていた。

とそこで三年の一人が進の視線に気付き睨んで怒鳴ってきた。

「おいつ！見せもんじゃねえぞっ！」

とそこで初めて成一達三人は進の存在に気付いた。

「進じやん、もう来ないかと思つたぜ」

と成二が言い

「進はあんたと違つてサボるう何て考えないの」

と千秋が言い

「これを付けろ」

と東が言いながら腕輪を差し出した。

「これつて・・・」

「一応先生からお前の分を預かつておいた、知つていろと思つが話であつた緊急用の腕輪だ」

進はへえーと声を漏らしてまじまじとその腕輪を様々な角度から見た、これと書いて凄いものには見えなかつた。

「あ・・・それよりこの状況は？」

進の質問に東は頭を搔きながら

「あの成二^{ばか}が、また無駄に喧嘩を吹つ掛けたんだ。まあ理由は分かるから責めないが・・・」

と溜息混じりに答えた。進はまだ睨み合いを続けている一人を見て（理由ねえ・・・どんな理由だろ?）

と考えていた。とそこで睨み合いに変化が起きた。三年生の一人が痺れを切らして地面の砂を蹴り上げたのだ。地面の砂は土属性の魔法が附加されているされている様で次第に集まり数本の針となつて飛んでいった、成二是それを手で払う動作で起こした突風で簡単に吹き飛ばす。それが合図となり戦闘が始まつた。と言つても進と東

は見ているだけだが・・・。

千秋は目を瞑つてその場から動こうとしない、結果的に三年生の攻撃は動き回る成一ではなく千秋に言つてしまつたが・・・。寸でのところで成一が千秋と放たれた魔法との間に割り込んで風の結界を張り千秋を守る。と言つても流石に一対五の状況なわけで少しずつだが成一の風の結界は確実に削られていた。だがそこでやつと千秋が目を開き「成一退いて」と大きな声で言つ。

待つてましたと言わんばかりに成一は笑みを浮かべその場から飛び退き・・・瞬間炎によつて作られた龍が身を躍らせて三年生五人に向かっていく、五人は驚愕の目でそれを見ると相殺しようと魔法を放つだが放つた魔法が炎の龍に当たつても炎の龍は全く勢いを弱らせる事無く五人に襲い掛かつた。

とそこで炎の龍は真つ二つに裂かれる、黒い閃光によつて・・・。

「こんなところで喧嘩とは・・・いい度胸をしてるじゃないか」

そう言つて現れたのは黒い大鎌を担いだ聖徒戒の長、天草義輝だつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4507d/>

魔法学校『武陽中学校』にて

2010年10月11日02時11分発行